

# 史跡探訪レポート

秋季市内現地学習資料 二〇二四年十月二十七日

矢島 嗣久

## JR別府駅北地区仲間通り地区ウォーキング資料

### 1 JR別府駅

JR別府駅は明治四十四年（一九一一年）七月十六日、亀川駅と別府駅が開通。北九州、小倉方面のお客が来別。飯塚の炭鉱王、麻生太吉、伊藤傳右衛門、佐藤慶太郎が山の手に別荘を建てた。

### 2 油屋熊八像

油屋熊八は四国愛媛県宇和島の出身。

あぶらやぐまはち  
油屋熊八 一八六三年八月二十九日（文久三年七月十六日）生まれ—一九三五年（昭和十年）三月二十七日、別府で死去。熊八は、歡樂的な温泉都市大分県別府市の観光開発に尽力し、田園的な温泉保養地由布院の礎を築いた実業家。

### 3 駅前高等温泉

駅前高等温泉、大正十五年（一九二六）四月十日完成、同四月十二日竣工式。駅前自治会の町営温泉。「ハーフ・ティンバー」半木造形式、イギリスの民家を思わせるスタイル、木造に煉瓦や石を詰めている。施工は日本人の棟梁。建築費用は当時千円普請だったという。現在の建物の建設費用は一万円又は二万円説がある。（総事業費三万円）  
左側、高等温泉、三〇〇円—↓現在二〇〇円  
単純泉、男女計四槽。ぬる湯。

右側、普通温泉、一〇〇円—↓現在二〇〇円  
炭酸性単純泉、男女計二槽、あつ湯。

合計六槽。宿泊、個室、七部屋、二、五〇〇円。  
大広間、三十畳、一、五〇〇円。休憩、二時間、六〇〇円。

### 4 延命地藏尊

別府湾の沖合いにあった瓜生島（沖の浜）と久光島が慶長年間（一五九六年）の大地震で海に沈んでしまった。その際、千人近くの人が亡くなったり、行方不明になったため、人々の苦悩を癒すために建立された。毎年旧暦の七月二十四日のご縁日には永代施餓鬼会が行われます。ここでお参りすると

延命（長生き）できると言われていた。近所の酒屋さんがきれいな花を供えていただいている。

## 5 春日温泉

春日温泉は公民館、自治会事務所が入っている建物の一角に共同浴場が併設している、といった感じの共同浴場である。「春日温泉」の看板を見逃し一度は通り過ぎてしまうほどに、周囲に溶け込んでいる建物。印象的な水色塗りの建物で、建物横に温泉入り口がある。建物の敷地裏手には源泉があり、ポコポコと音をたてていた。

入り口より数段下に浴槽と脱衣所が一体化している別府では普通の造りの春日温泉。外は小雨で少し薄暗い浴室であったが、そのまま湯浴みする。四人ほどの入れる浴槽はタイル造りの簡易なものだ。そこにちよっとキシむ感じの無色透明、ほぼ無味で弱温泉臭のする湯がなみなみと満たされている。湯温は四十四℃。隠れた感じのひなびた系共同浴場という印象。

下町風情の残る町並みに溶け込んだ共同浴場である。木造の建物はかなり古びていて、外観は勿論、男女別浴室も雰囲気

気満点。五〜六人ほど入られる四角い浴槽には熱めの湯が投入され、浴槽内で適温。土類系の何とも言えぬ葉臭が漂うギチギチ湯だ。男女の仕切り部分にある古びた石塔は春日温泉に関するもの。

## 6 財間酒舗

島根県津和野の出身。大正十五年（一九二六年）、別府に財間酒店別府出張所を開店した。

## 7 かおり荘

駅前本町九―三三、仲間通り。昭和八年（一九三三年）の建築。

約八十年の歴史有り。裏に自家温泉有り。

二Fに木製のベランダがある。

## 8 立花温泉

駅前本町三―二（元別府村）にある。昭和三十七年（一九六二年）に創設された浴場で、木造瓦葺き平家建てである。温泉源は突き湯で、大字別府字仲間九六九―二にある。現在の経営は町有町営で管理者一人常駐。入浴料は、一人一カ月

四五〇円、七〇才以上二〇〇円、八〇才以上は無料である（昭和六十年）入浴時間は、午前六時三〇分から午後十一時まで。泉質は含食塩・重曹泉（昭和四十年年度「衛生研究所調」）。温泉は通りの東側、奥にある。

## 9 別府浜離宮、割烹旅館、立花通り

以前は「昭和園別荘」といつていた。立地は、別府の繁華街近くを国道十号が通っているにも関わらず館内はとても静かであるで別世界にいるよう。

お食事処は、築一〇〇年の建物でとても趣があり、宮大工しか手入れできないとか……。昔のガラスにしかないゆらぎごしに見る庭もとても風流で見る度に癒さる。

景観的には、周りの喧噪から一線を画しているため、別府湾の近くであるが海は見えない。

敷地内の温泉はもちろん源泉かけ流しなので温泉に入ってゆつくり癒されたい方にはお勧め。

## 10 山田別荘

別府タワー前の山手の道を上ると、右側に入母屋造棧瓦葺木造二階建の建築が眼につく。旅館、山田別荘である。

格式のある式台付の玄関構え、旅館らしからぬこの旅館、当初はその名の通り、ケープブルラクテンチと関わりのある広島素封家、山田英三氏が夫人の保養別荘として昭和五年（一九三〇年）に建造したものである。

戦前、錦水園を始め多くの上質な別荘建築を手がけた地元田尻芳雄棟梁の手になるもので、静寿堂と名付けられ戦後旅館に衣更えをした。

敷地は約六〇〇坪、時代物のカメラや掛時計が蒐集され、玄関脇の洋間と共に時の流れを感じさせる。

和風の主屋は南庭の池泉をめぐり、雁行形に配置され、雨戸を兼ねた一本引のガラス障子は引き込めば戸袋に納まり、庭園と一体となってオープンな室内空間を展開している。

ゆつたりとした部屋には帆足杏雨に学んだ甲斐扁山（こざん、虎山）や日本画家池田栄広の作品も展示され、訪れる人の眼を楽しませる。

センスのよい建主と棟梁が力を合わせて創り上げた別荘建築は個性的な宿として古き良き時代のロマンの香りを漂わせている。

玄関の和室には甲斐扁山こざんの扁額が掲げられている。

## 11 弓松温泉

別府タワーの近く、「三泉閣」というホテルの裏手にある共同浴場。

路地の奥にあり、なかなか良さげな雰囲気なのだが、地元組合員以外の入浴は不可であった。非常に残念である。

## 12 浄土真宗本願寺派別院

別府別院は浄土真宗本願寺派の直属寺院。直属寺院とはご本山以外の寺院で、ご門主が住職となる寺院のことを言う。日本各地に所在し、北海道の札幌別院・東京の築地別院・大阪の津村別院・鹿児島鹿児島別院など四七の別院がある。

歴代ご門主の特別の由緒によって設けられた別院も多く、特に別府別院は第二十二世ご門主鏡如上人ゆかりの別院でもある。

別院はご本山の統轄のもと、地方において浄土真宗のみ教えをひろめ、法要・儀式を行い、ご門徒その他の信者を教化育成するための中心道場としての役割をもっている。

年間の主な行事としては、毎月五・六日の常例法要、毎月十五・十六日の恒例法要、四月のご正忌報恩講、十月の鏡如忌等が行われる。

別府別院の沿革は比較的新しく、説教所の設立にはじまる。

大分教区はもともと、南豊教区（豊後）と北豊教区（豊前の一部）が合一されたもので、明治三〇年（一八九七年）代後半、南豊教区には別院は存在せず、間借りの教務所（教区事務所）のみであった。

北には宇佐の地に四日市別院があるが、地理的に県南からは参詣に非常に不便さを感じていた。

昭和六年頃（一九三二年）、別府市は南豊教区の地理的的中心地であり、かつ国内でも有名な温泉地であったため、本願寺説教所設立の原案が当時の有力者の手によってなされ、時あたかも勝如上人（大谷光照前ご門主）伝統奉告法要の記念事業として建設することとなった。

設立当時、説教所には門徒といえるものは一戸もなく、門徒に募財をしての建設ができない状態であったため、大変な苦労があったという。そのためか本堂は、大分県立鶴崎工業高校の生徒の教科実習として建築された。記録によると、竣工式は昭和七年（一九三二年）七月三日とされている。

その後、昭和十八年（一九四三年）に本願寺別府教堂と改称、昭和十九年四月に一県一教区で大分教区となった。別府別院と改称されたのは昭和二十四年（一九四九年）五月二日

のことで、昭和二十三年（一九四八年）十月五日、病氣療養のため別府鉄輪の地におられた第二二代ご門主大谷光瑞（鏡如）上人のご往生され、現本堂にて仮葬儀（おそらく通夜）が営まれたことが由縁となっている。

そのため、当別院は鏡如上人のご分骨を納骨所にご安置し、上人のご遺品、ご遺墨等を陳列する大谷記念館が建物の二階に併設されている。

### 13 大谷記念館

大谷光瑞（鏡如）上人は、浄土真宗本願寺派本願寺明如宗主（第二十一世）の長男として明治九年（一八七六年）誕生した。天資英邁にして気宇広大。二十八歳で二十二世の法灯を継ぎ、三十九歳で辞任するまで、視野を広く注ぎ、教団の国際化をはかるため、仏蹟探検（大谷探検隊）・海外伝道を手掛け、内にあっては、宗祖親鸞聖人六五〇回大遠忌を未曾有の盛儀のなかに厳修し、宗制刷新、人材育英と教団の拡大と法義宣布に尽力した。

辞任後は、アジア各地を歴訪し、各地に別荘や庭園を構え、農園経営や人材養成、仏典研究（梵本翻訳）等、その業績は

一宗門内にとどまらず、政界、経済界、産業界、教育界等々、広く時代の寵児となり、思想家、実業家として多くの支持と称讃をあげた。

昭和二十三年（一九四八年）、病氣療養中の別府市鉄輪で示寂（死去）した。この大谷記念館は上人遷化せんげの地・別府に建てられた別院に創設され、大谷家より下附された法衣法具、並びに遺墨、遺品、著書、旧蔵書等を陳列し、遺徳を偲ぶものである。

### 14 秋吉邸

海門寺公園の北側、春日通りを歩いていると、どつしりとした重厚感のある入母屋造棧瓦葺平屋建の木造建築が眼につく。高田の代官兼総庄屋をしていた岡松家の建物で、大分市から昭和初期に移築され、戦後秋吉家がこれを譲り受けて現在に至っている。

この家で生まれ育った岡松堯谷やうこくは、帆足万里門下の俊才で、明治の頃東京大学の教授となった人である。

入母屋造りの玄関をはいると、幅一間の畳敷きの回り縁をもつ一〇畳の座敷に迎え入れられる。

縁側と座敷の境には、おさ形の欄間が入り、間仕切り欄間は北斗七星の透かし彫り。長押にうたれた釘隠しの割菱家紋に、時の流れが作りだした風格がにじみでている。

玄関の「良聞居」の額や、お茶室の屏風の「大夕立くるらし由布のかきくもり」の句は高浜虚子の直筆で、ホトトギスの同人である秋吉夫人（秋吉方子<sup>かたこ</sup>）の招きで、再三別府を訪れた虚子のこの住宅への深い思い入れが偲ばれる。

このように、秋吉家住宅は肥後藩高田手永や別府俳壇の歴史を語る建物として、北浜の片隅に今もひそやかに呼吸<sup>いき</sup>づいている。高浜虚子は正岡子規の一番弟子である。北浜の秋吉邸の庭には高浜虚子邸から譲り受けた椿が花を咲かせているので、この家を「虚子庵椿」と呼ばれている。

## 15 中井質屋

昭和初期、昭和十年（一九三五年）頃の建築と思われる。

## 16 海門寺温泉

古くは海門寺公園温泉とも言われており、昭和十一年（一九三六年）に市営温泉になった。別府駅から徒歩約五分の場所にあり、市民の方だけではなく、観光客の方にも親し

まれている温泉である。平成二十二年（二〇一〇年）二月にリニューアルオープンした現在の海門寺温泉は、施設全体をバリアフリーとし、外観は隣接する海門寺公園と調和した落ち着いた風情を感じられる和風の外観となっている。また温度の異なる「あつ湯」と「ぬる湯」の二種類の浴槽の設置により、熱い温泉に慣れていない観光客の方にも入浴しやすく、別府温泉の魅力を身近に感じていただける施設になっている。

## 17 海門寺公園

みんなにやさしい街中のオアシス J R 別府駅東口にほど近い海門寺そばに位置し、バリアフリーをテーマにした公園内には段差がなく、子どもやお年寄り、障がい者も利用しやすい多目的なスペースが広がる。

別府八湯の滴をイメージしたモニュメントや、コンビネーション遊具などが主要施設。レトロな雰囲気漂う憩いの空間でのんびり過ごそう。

## 18 海門禅寺

別府市北浜にある海門禅寺は、海門寺公園、海門寺温泉

と隣接した禪寺で、境内には別府市指定天然記念物のクロマツがある。このクロマツは別名「しぐれの松」とも言われ、樹高約六m、胸高幹囲約二四〇cm、樹冠は東六・五m、西一〇・二m、南三・〇m、北一三・〇mの広がりを持っていて、支柱に支えられている。

## 19 芭蕉句碑

海門寺境内

「作り木の庭をいさむる 時雨かな」（いさむるは勢いをつける）

## 20 時雨の松

作り木の庭をいさめる 時雨かな 松尾芭蕉

## 21 西本願寺別院

別府別院は浄土真宗本願寺派の直属寺院。直属寺院とはご本山以外の寺院で、ご門主が住職となる寺院のことを言う。日本各地に所在し、北海道の札幌別院・東京の築地別院・大阪の津村別院・鹿児島鹿兒島別院など四七の別院が存在する。

歴代ご門主の特別の由緒によって設けられた別院も多く、特に別府別院は第二世ご門主鏡如上人ゆかりの別院でもある。

別院はご本山の統轄のもと、地方において浄土真宗のみ教えをひろめ、法要・儀式を行い、ご門徒その他の信者を教化育成するための中心道場としての役割をもっている。

年間の主な行事としては、毎月五・六日の常例法要、毎月十五・十六日の恒例法要、四月のご正忌報恩講、十月の鏡如忌等が行われている。

別府別院の沿革は比較的新しく、説教所の設立にはじまる。大分教区はもともと、南豊教区（豊後）と北豊教区（豊前の一部）が合一されたもので、明治三十年（一八九七年）代後半、南豊教区には別院は存在せず、間借りの教務所（教区事務所）のみであった。

北には宇佐の地に四日市別院があったが、地理的に県南からは参詣に非常に不便さを感じていた。

昭和六年頃（一九三二年）、別府市は南豊教区の地理的的中心地にあり、かつ国内でも有名な温泉地であったため、本願寺説教所設立の原案が当時の有力者の手によってなされ、時あたかも勝如上人（大谷光照前ご門主）伝灯奉告法要の記念事業として建設することとなった。

設立当時、説教所には門徒といえるものは一戸もなく、門徒に募財をしての建設ができない状態であったため、大変な苦勞があったという。そのためか本堂は、大分県立鶴崎工業高校の生徒の教科実習として建築された。記録によると、竣工式は昭和七年（一九三二年）七月三日とされてる。

その後、昭和十八年に本願寺別府教堂と改称、昭和十九年（一九四四年）四月に一県一教区で大分教区となった。別府別院と改称されたのは昭和二十四年（一九四九年）五月二日のことで、昭和二十三年（一九四八年）十月五日、病氣療養のため別府鉄輪の地におられた第二十二代ご門主大谷光瑞（鏡如）上人がご往生され、現本堂にて仮葬儀（おそらく通夜）がいとなまれたことが由縁となっている。

そのため、当別院は鏡如上人のご分骨を納骨所にご安置し、上人のご遺品、ご遺墨等を陳列する大谷記念館が併設されている。

## 22 大谷記念館

大谷光瑞（鏡如）上人は、浄土真宗本願寺派本願寺明如宗主（第二十一世）の長男として明治九年（一八七六年）誕生した。天資英邁にして氣宇廣大。二十八歳で二十二世の法灯を継ぎ、三十九歳で辞任するまで、視野を広く注ぎ、教団の

国際化をはかるため、仏蹟探検（大谷探検隊）・海外伝道を手掛け、内にあつては、宗祖親鸞聖人六五〇回大遠忌を未曾有の盛儀のなかに厳修し、宗制刷新、人材育英と教団の拡大と法義宣布に尽力した。

辞任後は、アジア各地を歴訪し、各地に別荘や庭園を構え、農園経営や人材養成、仏典研究（梵本翻訳）等、その業績は一宗門内にとどまらず、政界、経済界、産業界、教育界等々、広く時代の寵児となり、思想家、実業家として多くの支持と称讃をあげた。

昭和二十三年（一九四八年）、病氣療養中の別府市鉄輪で示寂（死去）された。この大谷記念館は上人遷化の地・別府に建てられた別院に創設され、大谷家より下附された法衣法具、並びに遺墨、遺品、著書、旧蔵書等を陳列し、遺徳を偲ぶものである。

## 23 秋吉邸

海門寺公園の北側、春日通りを歩いていると、どっしりとした重厚感のある入母屋造棧瓦葺平屋建の木造建築が眼につく。

大分市高田の代官兼総庄屋をしていた岡松家の建物で、大分市から昭和初期に別府市北浜に移築され、戦後秋吉家がこれを譲り受けて現在に至っている。

この家で生まれ育った岡松麿谷は、帆足万里門下の俊才で、明治の頃東京大学の教授となった人である。

入母屋造りの玄関をはいと、幅一間の畳敷きの回り縁をもつ一〇畳の座敷に迎え入れられる。

縁側と座敷の境には、おさ形の欄間が入り、間仕切り欄間は北斗七星の透かし彫り。長押にうたれた釘隠しの割菱家紋に、時の流れが作りだした風格がにじみでている。

玄関の「良間居」の額や、お茶室の屏風の「大夕立くるらし由布のかきくもり」の句は高浜虚子の直筆で、ホトトギスの同人である秋吉夫人（秋吉方子）の招きで、再三別府を訪れた虚子のこの住宅への深い思い入れが偲ばれる。

このように、秋吉家住宅は肥後藩高田手永（大分市）や別府俳壇の歴史を語る建物として、別府北浜の片隅に今もひそやかに呼吸づいている。

高浜虚子は正岡子規の一番弟子である。北浜の秋吉邸の庭には高浜虚子邸から譲り受けた椿が花を咲かせているので、この家を「虚子庵椿」と呼ばれている。

## 24 中井質店

昭和初期、昭和十年（一九三五年）頃の建築と思われる。

## 25 ホテル三泉閣

別府タワーの道路を隔てて西側にある。一階ロビーの右手、北側に荒金大琳先生揮毫の墨書がある。いろは四八文字を漢字でしたためている。

## 26 別府タワー

別府タワーは、大分県別府市にある観光塔である。旧名、観光センターテレビ塔。高さは九〇m。一九五七年（昭和三十三年）に完成。名古屋テレビ塔、通天閣に次ぎ、日本で三番目に建てられた高層タワーで、別府観光のシンボルとして親しまれ、国の登録有形文化財に登録されている。運営は、別府観光開発株式会社。設計者は早大名誉教授の内藤多伸である。名古屋テレビ塔の次が大阪の通天閣、次が別府タワー、さつぽろテレビ塔、次が東京タワー（一九五八年〔昭和三十三年〕竣工）である。タワーの六兄弟と云われている。



山田別荘

